

巻 頭 言

問題を解決する技術力と責任

Technology to Solve a Problem and Responsibilities



東京海洋大学大学院 海洋工学系 教授

庄 司 る り

Ruri Shoji
Professor

Tokyo University of Marine Science and Technology
Department of maritime System Engineering

まずは、創立100周年を迎えられることに、お祝いを申し上げます。100年もの間、ある組織を継続させるためには、大きな波をいくつも乗り越えねばならず、大変な苦労があったことと思います。またその間、無線技術を牽引し、常に最先端を走り続けてきた貴社に敬意を表します。私の専門から、どうしても船や海に視点が向きますが、レーダーや無線通信をはじめとする船の世界の技術の発展は、貴社の発展とともに歩んできたと言えると思います。

船は人類最古の交通機関と言われており、帆船の時代が長く続いてきました。18世紀の蒸気船の登場後、主流は動力船となり、今では400m級のコンテナ船が航行するようになっています。この18世紀以降の科学技術の進歩は、弊害も含みながらではありますが、人類の生活に便利さと快適さをもたらす、様々な可能性を与えて来ています。その中で、1895年のマルコーニの実験から始まる無線技術の利用は、今の私たちの生活の中でなくてはならないものとなり、その活用はどんどん広がっています。私が学生の頃に、ハワイ沖の練習船から、モールスによる電報をお願いしたこと

がありました。今は、卒業生から「これからアデン湾に入ります！」などと、携帯電話の絵文字付メールでの連絡があります。技術の進歩は人間関係も円滑にするものだなあと、感心しています。

しかし便利になるにつれ、その弊害が目立ってきたり、負荷が大きくなったりすることもあります。携帯電話とメールが、休日や出張中でも通常業務から逃れられない状況を作っていることは、誰もが感じていることでしょう。また私の身近では論文作成もひとつの例で、ペンで書いていた頃の修正は大変でしたが、ワープロの利用により、格段に楽になりました。しかし、書式に合わせるための作業に、かなりの時間と体力を費やすようになっています。

わかりきっている話ですが、技術は何らかの問題を解決するために発展するものだと思います。ですから、技術の発展により得られる成果は、より精度が高く、有用なものであるのはもちろんで、何らかの問題をできるだけ解決するものであるはずで、かつ、ユーザが解決を得るために苦労するものであってはいけません。これまでの技術は「使いこなす努力」が必要な場

合が多くありました。今では、容易に高い精度の結果を得た上で、さらに役に立つことに繋がる技術でなければならないと考えられています。そのためには、要素となる個々の技術を発展させるだけでなく、複数の技術を結びつけて新しい結果を生み出し、得られた結果をわかりやすく提供し、それがどれだけ役に立っているかを検証して、さらに改善していくことが必要です。単にある技術を提供するだけでなく、その技術を必要とする問題をきっちり解決するところまで「責任」を持つことが重要だと考えます。そのためには、自分の範囲外まで踏み出したり、他へ引き継ぐこともあるのでしょうか。

前述したように、貴社で発展してきた技術は、現在の船の運航に必要な不可欠なものとなっており、安全で効率的な運航の実現、という「解決」を与えて来ています。しかし船の世界では、環境、船員、国際化や標準化など、まだまだ問題が多くあり、IMO（国際海事機関）をはじめ、各国や組織で様々な工夫がされています。「日本無線」という企業はこれらの問題の解決の一端を担う責務を負うべき企業であると思います。日本の海運にとどまらず、世界の海運のため、延いては私たちの豊かな生活のために、その技術力と問題解決力を伸ばして頂かなければなりません。貴社は、この100年の間に、そういう企業として成長し、現在にあるのだと思います。

かつて船の無人化は難しいと考えられましたが、今あらためて自律航行という形での「無人化」が検討されています。「無人化」の是非はともかく、技術の発展に寄与するものとしては、これを見据える必要があります。これを実現するためには、これまで積み重ねてきた技術やそれらの融合の他、革新的な考え方と実現力など、これまでとは異なる力も必要でしょう。そしてまた、その技術そのものや技術を提供するものへの「信頼」も重要な要素であると考えます。つまり、革新的な技術の発展は、これまでの信頼の上にあつてこそ、進めていけるのではないのでしょうか。この「信頼」というものは、作るには長い時間がかかりますが、壊れるのは一瞬です。一度「信頼」を得た企業は決してそれを壊さず、より成長していかなければなりません。それが、技術力を持つものの「責任」だと思えます。

この100年で、日本無線株式会社の技術力は、十分な「信頼」を得てきています。次の100年では、さらに飛躍して、海運全体への貢献と、私たちの生活そのものを含めた社会や世界全体への貢献を念頭に、その技術力を高めるという「責任」を果たしていただくことを期待します。200周年に向けて、ますますのご発展を祈念しております。

プロフィール

1986年東京商船大学商船学部航海学科卒業
1989年東京商船大学大学院商船学研究科修士課程修了
1989-1992年（株）オーシャンルール
1992年東京商船大学助手、1999年同大講師
2003年東京海洋大学講師、2010年学位取得 博士（工学）、
2010年同大准教授
2012年同大教授
船舶の最適航路選定（ウェザールーティング）、海上交通工学、
船陸間通信、運航支援システム等に関する研究に従事。
日本航海学会、船舶海洋工学会に所属。
国土交通省交通政策審議海事分科会臨時委員、
総務省情報通信審議会専門委員、千葉県地方港湾審議会委員等。